

第二十五回 文芸芸研

高知大会基調講演

どのような人間観・世界観を

どのように育てるか

西郷竹彦

一九九〇年 八月三日

於 高知ちばさんセンター

今日から三日間、私どもが数年来ずっと、研究集会の研究テーマにかかかっております「人間観・世界観を育てる」というテーマで、全体会また分科会を進めていきたいと思っております。

「人間観・世界観」といいますと、何かむつかしくて、すんなり理解しがたいところがあるかと思っております、これからこの点について、詩を使って、お話ししようと思っております。その前に、最近文部省によります反動的な「生活科」が目に見えて強まってきています。そのことについて若干ふれたあと、本題に入りたいと思っております。

「生活科」の反動性

職場にいらっしゃる先生方は身をもって体験されていると思いますが、日の丸・君が代の強制、それからまた最近「生活科」を教育現場へ押しつけてきています。この「生活科」というものがどのような意味において反動的であるかということについて、少しお話ししてみたいと思っております。

だいたい「生活科」ということが叫ばれるようになりましたのは、すでに二十年ほど前のことです。といえますのは、あの悪名高い「期待される人間像」が打ち出されてきて、国民から総スカンを受けた。続いてまた、特設・徳目主義道徳教育というものをこれまた強力に教育現場へ押しつけようとしたのです。道徳教育指導資料なるものを印刷して、それを無料で配付しました。国民の血税を使って、そういうものをいっぱい作って全国津々浦々にばらまいたわけです。この特設道徳教育もまた教育界だけでなく、すべての国民の総反撃をうけて、潰されてしまった。そこで文部省は何とかして戦前の修身教育を復活したい。つまり徳目道徳教育を何とかして教育現場に押し込んでいきたいという魂胆から「生活科」を打ち出してきたのです。しかし、これが道徳教育だということを、正面から謳ったのではなく、またもや反撃をうけることは明らかですから、そこはさすがしく、社会科・理科をいっしょにしたような教

科である、しかも子供というのはまだ頭脳が十分発達していないから体験を通してわからせる。しかも体験といっても遊びを通して、自然認識や社会認識を育てる。それが「生活科」というものなんだ。こういうふうな謳い文句で打ち出してきたわけです。これは当然、社会科の民間教育団体、理科の民間教育団体から総反撃をうけることははっきりしていますから、そういう誤魔化しの言い分で打ち出してきたわけです。

確かに、体験を通して認識させる。これは結構なことです。それを、遊びを通して自然とは・社会とはということを確認させる。これも結構なことです。そのとおりであればそれなりに結構なのです。ですから中にはなるほど結構なことだと言う人達もあったようです。ところが最近になりますと、一言も自然認識・社会認識という言葉を使わなくなりました。二十年前、自然認識・社会認識を育てるために、それを生活や遊びといった体験を通してわからせるのだと言っていた文部省もピタッとそのことを口にしなくなりました。そして実際にこれが「生活科」の典型的な見本だという形で打ち出して来たモデル授業があります。その中に、有名な実践例なのでみなさんごぞんじだと思えますが、「アリの道」というのがあります。アリが行列を作って、行き帰りする。これをビデオで見せて、それで結局何を指導したのかといえますと、「みなさんごらん。あのアリのような小さな虫だって、ちゃんと列を作って行き帰ります。まして、あなたたちは人間なんだからアリに負けないように、学校の行き帰りにちゃんと歩きましょう。どこかへ行く時も列を乱さないように歩きましょう。」というのです。要するに、そういうことをやっているわけです。

いったいどこが、かって二十年前に自然認識・社会認識を体を通して形成するんだと言っていたその見本なのでしょう。子供を管理するために、しつけ＝道徳をやっているだけにすぎない。いったいどこでアリという教材をもち

とにして「自然というものはこういうものだよ。社会というものはこういうものだよ」と教えているのでしょうか。

ごぞんじの通りアリは餌を食べます。その餌を見つけたとします。それをくわえてアリの巣まで戻ってきます。そうすると仲間のアリがまた同じ道をたどって行き帰りします。そこに餌がある限りずっと続きます。餌がなくなるとアリの道も消えてしまいます。では、どうして一匹のアリが仲間のアリに餌のありか(場所)を教えるのか。そこに自然の秘密があるわけです。そういうふうの問題を投げかけると、子供たちはどうしてかと考えるようになるでしょう。実は蒸発しやすい液をつけているのです。その臭いをたどって仲間のアリがそこへ行く。そして餌を取ると臭いをつけて帰ってくる。また臭いをたどって行く。たくさん餌があると臭いの道も強く大きくなる。こういうわけです。そして、その液には二つの条件があります。ほかのアリの道と混線しないように、アリの種類によって臭いがちがっているのです。ですからほかのアリが来て、これをたどるといふことはしない。これは大事なことです。もう一つの条件は蒸発しやすい液ということ。この二つの条件が必要十分条件なのです。

どうして蒸発しやすい液でなくてはいけないのでしょうか。そういう時に、条件を考える時に、もう一つこれを裏返しに仮定という考え方を使って、もし蒸発しないあるいはしにくい液であったらどういふことになるかと考えてみる。いずれ餌がなくなります。餌がなくなっても臭いの道が残っているとしたらどうでしょう。後から後から無駄足するアリがいっぱいでてきます。ところが餌がなくなったアリは臭いをつけずに帰ってきます。そうするとまもなく臭いの道が消えてしまいます。そうすると巣から出ていくアリはいなくなる。アリという小さな虫でも、生きていくためにそういう見事な条件をふまえた生き方をしているのです。それなしにはアリは集団として生きていくことができません。

アリが生きていくためにはまず食うことです。それから身を守ることです。暑さ寒さ敵から身を守ることです。生きていくために食うということ、集団でもって食うということ。そのために何が必要かということ。こういうことが子供たちにわかった時、たった一匹の小さなアリさえ集団の中でどういうふうに生きていくすべをもって人間か。要するにそういう条件を踏まえて生きているのだと。これは何もアリに限りません。蝶々だって魚だって人間だってそうです。人間はただし複雑な社会生活をしています。たった一つや二つの条件で生きているわけではありません。いろいろな条件をかかえて生きています。というふうなことが小さい子どもでも、アリならアリというものを通して、アリというものはどういうものかということだけではなくて、生きていくということはどういうことか。自然とはどういうことかということがわかる。ある驚きをもって、感動をもって認識する。これが本当の教育だと思ふのです。それを例えば、遊びという場で体験を通してというのがなら賛成です。何も本を開いて、教科書を教えないければならないことはありません。野原へ飛び出して行って、アリの行列を観察するとか。もちろん臭いの問題はただ目で見ても、子供が観察してわかることではありませんが、例えばそうやって体験を通してでもけっこうです。どういう体験をとおして、どういう筋道をとおして、どういう見方・考え方を使って、子供たちに物事の本質とか、法則とか・価値とかを認識させるのか。ここに地道ですけどもたゆみなく進めていかななくてはならない教育というもののあり方があると思ひます。

ところが、先ほど申し上げましたように理科と社会をいっしょにしたような自然・社会認識を教えるんだと大法螺吹いた文部省が、現にやっているのは道を歩く時には、列を乱さずちゃんと歩きましょうというしつけを、こういう名目だけを教え込んでいるのです。これが「生活科」というものの本質・実体なのです。

「法則」化・道徳教育

さて、文部省が上の方からそういう形で教育現場に「生活科」を押しつけてきている時、それと相呼応して民間の側にそのような政策に媚びて、それと一体となって進めているグループ、運動というものがありません。それが「法則」化なのです。ここにも「法則」化の方がみえているかもしれませんが、異論があればどうぞ後で反論なり何なりしていただきたい。私がこれから語ることは事実そのものです。その事実そのものについてみなさん方に考えていただきたいのです。文部省は道徳教育の中でやりたかった。しかし、それを引っ込めて「生活科」という名のもとに、民間教育団体が戦後作り上げてきた理科・社会科の成果を押しつぶして、その上で「生活科」の名のもとに道徳教育をおし進めようとしているのです。そういう時期に「法則」化は「道徳教育」を打ち出してきた。そしてさらにその上、「法則化・生活科」なるものをやるんだと言いついてきている。

では「法則」化が打ち出してきた道徳の授業がどういう授業であるのか。これからお話ししてみたいと思います。「法則化道徳授業双書」というシリーズ第一巻に「命の授業」というのがあります。なるほど「いのち」とはなんぞやということを教えることに異論はありません。むしろ、「いのち」ということについて深く子供たちに認識させたいと私も願っています。そこで、『命の授業——道徳の授業の改革を目指して——』という本をみてみましょう。著者は深沢という群馬県の小学校の教師です。どんな実践をしたのかといいますと、〈教育委員会が学校の教育を見て指導・助言をおこなう〉いわゆる〈計画訪問〉で〈教師が授業を行い指導主事にみていただいた〉のだそうです。〈私がその日四校時に行った授業が「命の授業」であった〉。こういう書出しを授業記録の冒頭にすえています。

一「命の授業」授業記録 — 学級通信「チャレンジ」より

突然と一人の子を指名して次のことを尋ねる。

発問一 あなたにとって大切な人は誰ですか。

このことを一〇くらいに、次々と書いていく。家族・友だちをあげる子が多い。中には「先生」と、何と私をあげた子どもも数人いた。世界中の人、と答えた子どももいた。

水	40 ℓ
炭素	20 kg
アンモニア	4 ℓ
石灰	1.5 kg
リン	800 g
塩分	250 g
硝石	100 g
イオウ	80 g
マグネシウム	50 g
フッ素	7.5 g
鉄	5 g
ケイ素	3 g
マンガン	3 g
アルミニウム	1 g
その他少量の13の元素	
計	3,000 円

「仕事が増えたとき読む本」(笠巻勝利著, PHP研究所) P. 215

この表を読み上げてから、

「これらをお金にすると、これだけです」

と言いつつ、三〇〇〇円と書いた紙を掲示した。

発問三 科学的に人間の値段をつけると、

三〇〇〇円です。

文句のある人はいますか。

「文句のある人はいますか」——私が子どもたちを「挑発」する時に使う言葉の一つである。

一〇人ほどが発言した。

「これは生きていることを考えていない」「これらのものをあわせても人間は作れない」「人間は機械ではないのだから、このようにバラバラにしてそれぞれの値段をつけてもだめだ」「三〇〇〇円じゃ、売っているおもちゃよりも安い」「生命はこんなものじゃない」といった意見が次々と出された。

ここまで、十五分ほどである。

まず〈発問一 あなたにとって大切な人は誰ですか〉後十人ほど次々に言っている。そしてその後、次のような授業展開になるわけです。〈大切な人はいない、という人は手を挙げなさい〉。誰もいなかった。そこで〈指示二 みんな大切な人がいるようです。大切な人の中で、一人だけ頭にうかべなさい。大切な人を一人、頭にうかべられた人は、ピシッとする〉。〈ピシッとする〉というのは背筋を伸ばすことでしょう。〈三十秒弱でピシッとした〉と書いてある。そこで発問の二です。〈その人をお金で値段をつけるとするといくらですか〉まあ、変わった発問をする人です。クイズですからおもしろかろうと思います。案の定みんなざわめいて、「え!」、とか言っています。一分後、

言いたいことを言わせます。そうすると何百万から何百億、いやお金ではあらわせないとかいろいろ言って途切れたい。そこで、次のように説明しています。(先生が人間がいくらするか調べました。その研究の結果) 研究してないのに研究の結果と書いていますが、(実は人体の成分表、水が40ℓ、炭素が20kg、アンモニア4ℓ、石灰……そしてそれらが合計いくらと書いてあります。これをお金にすると三〇〇〇円です)そして発問の三です。(科学的に)科学的にと言っているのです。(科学的に人間の値段をつけると三〇〇〇円です。文句のある人はいますか) (「文句のある人はいますか」——私が子どもたちを「挑発」する時に使う言葉の一つである。)十人ほどがいろいろ発言しています。人間は機械じゃないとか、バラバラにして値段をつけられんとか、三〇〇〇円では売っているおもちゃより安いとかいろいろ、これが十五分ほど続きます。ここで教師は(科学的に人間の値段をつけると三〇〇〇円です)とこう言っています。

科学的というか

これが科学的ということでしょうか。こういう成分表みたいなのは科学的でも何でもありません。そもそもその表が載っているのは「仕事がいやになった時に読む本」という科学とはまったく縁もゆかりもないお遊びのクイズの本なのです。それを(科学的に人間の値段をつける)と言っているのです。結局子供たちは何を認識することになるのでしょうか。科学というものはちゃちなものだなあ、科学的な人間観というものはそんな粗末ないかげんなものか、人間を馬鹿にしているのではないか。こういうことにならないでしょうか。少なくともこれは科学的ではありません。科学とはまったく違うものです。それを(科学的に人間の値段をつけると三〇〇〇円です)と言っている。科学的ということ、子供たちにまちがった理解をあたえてしまうのではないのでしょうか。しかも授業者である深沢は、(先

生は人間がいくら調べた」と、(その研究の結果)としてだしています。本の中の一ページの表を出しただけなのに自分が調べた、研究した結果だとうそをいっているわけです。なぜそんなうそを言わなくてはならないんでしょう。しかも今度は追試——これも「法則」化のお家芸です——追試した教師が修正するのです。(先生が人間がいくらかということをつい三日三晩徹夜して、一週間も徹夜して)というふうにして調べたと。その調べた結果、つまり(値段が三〇〇〇円です)とこう言っています。なんでこんなことに徹夜しなくてはならないんですか。もちろん徹夜なんかしているはずがない。このようなうそを言ってまで、子供に取り入って、子供の興味・関心をさそってやろうとする。これは科学というものを、研究というものを冒瀆するものです。私たちはもっと誠実にあるがままに、子供と向かい合って授業を進めていけばいいのではないのでしょうか。なにも子供の御機嫌を取り結んだり、おちよくったり、あるいは調べもしないのに三日三晩かかって調べたなんて、そういう嘘を言わなくても、ちゃんと子供の本質的な興味・関心、探究心に訴えて授業を組織することができるはずですよ。またそれをするのが本当の教育だと思うのです。

いじめ問題をめぐって

次に、いじめ問題に入ります。ある福島県の中学三年生の男の子が金を脅し取られ、殴られて、いじめを苦にして自殺したある新聞記事をコピーして読ませています。いじめの事実が書いてあるわけです。新聞を活用することがいけないというのではありません。時には新聞記事を教材化することも必要だし、おおいにあっていいことです。ところがそのいじめの問題をどういうふうに子供たちに話し合わせていくか、そこが問題なのです。(感じたことを書きなさい。三分です。四分を、言いたい子に自由に立って言わせます。のべ三十人が次々と発表した。非常に活発です)。それはそうでしょう。これから子供の発言をみてみましょう。(以下引用「命の授業」一一ページ)

指示三 感じたことを書きなさい。三分です。

四分後、言いたい子に自由に立って言わせた。のべ三〇人以上が次々と発言した。

○一対一で勝負すればよい。大勢でいじめるのはひきょうだ。

○いじめられて黙っているのはよくない。はっきり誰かに言えばよい。

○罪もないのにいじめられてかわいそう。

○「アホンだらあ」と落書きしてあるが、バカ共はいじめていた人たちだ。

○校長先生のいうような言葉ではない。

○顔の表情でわからないような教師は悪い。

○校長は無責任だ。いじめをなくすのが教師の仕事ではないか。

○むごいことだ。

○金がなければ自分で貯金すればよい。清二君は生きてかえらない。

○自殺しないで、自分もグループをつくって正面からけんかすればよい。

○血も涙もない。死ぬのもよくない。

○おとなしい性格だからといっていじめるのはへんだ。

○いじめかグループの親の顔が見たい。

○校長はひきょうだ。にげている。

(後注・実は深沢実践を「追試」した宮城県の三浦勝幸・内海俊行の五年生での追試の結果も同様であった。参考までにそれらを引用しておく。)

・どうして一人だけに、よってたかっけいじめをするのだろうか。

・被害者も早く先生に言えば良かったのと思う。先生も知っていたのなら取り締まりをすればいいのと思う。

・人殺しと同じだ。

・いじめられたからといって、自殺することはないと思う。

・もう少し、勇気を出していれば、自殺なんかすることははないと思う。

・両親に相談すればよい。

・一人で悩むなんてかわいそうだ。

・おとなしい性格がかわいそうだ。私がいじめられたら、学校などには行かない。

・いじめた人は、どんな気持ちで暮らしているのだろうか。

・警察に行くこともできたのではないか。

・いじめる人も、いじめられたらどんな気持ちか、考えればいい。

・校長先生の責任だ。

へ二対一で勝負すればいい。大勢でいじめるのはひきょうだ(これは批判です。へいじめられて黙っているのは良

くない。はっきり誰かに言えばよい。こんなことができるなら最初からいじめ問題なんて起きないのです。〈罪もないのにいじめられてかわいそう〉お気のどく、かわいそうというわけです。それから〈何もかもみんな悪い〉というのです。〈「あほんだら」と落書きしてあるが、バカ共はいじめていた人たちだ〉とか。〈校長先生のいうような言葉ではない〉校長に対する批判です。〈顔の表情でわからないような教師は悪い〉〈校長は無責任だ。いじめをなくすのが教師の仕事ではないか〉言われてみるといぢいぢうなすけすね。〈むごいことだ。金がなければ自分で貯金すればよい。〇〇君は生きかえらない。／自殺しないで、自分でもグループを作って正面からけんかすればよい。／血も涙もない。死ぬのもよくない。／おとなしい性格だからといっていじめるのはへんだ。／いじめたグループの顔が見たい。／校長はひきょうだ。にげている。／一つ一つの批判自体はそれはそうであろうと思います。〉

「いじめ」問題授業批判

さてそこで問題は、他者を批判している自分自身はどうなっているのかということなのです。他者を批判するといふことは誰でも、いつでも、簡単にできることです。わざわざ指導しなくても、たった三分でこれだけの批判をすることができます。それは誰でも、いつでもできるような批判だからです。どんな批判でも人を批判するのは、簡単なことです。たちまち十や二十の批判は出てきます。おそろくどの学級でやっても出てきます。現にこの本でも追試という例があります。しかし、ほとんど全部自分の問題としてかかわっていない。いじめた方も悪いが、いじめられた方も悪い。それを取り巻いているものもみんな悪い。自分は別。これでは自分の問題を棚上げするという傍観的な生き方を助長するだけの授業になってしまっています。

ところが、以上のような子どもたちの発言について、授業者深沢は次のように自評しているのである。

この子の発言も、迫力があつた。怒りがあつた。いじめた子に対する怒りと、教師に対する怒りと、自殺した子に対する怒りである。どこに重点をかけているかは、一人ひとりによって異なる。ある子は、校長・担任に対して怒っていた。

とにかく一〇分ほど発言が続いた。そして、ピタッと意見が出なくなった。

そこには自己批判の言葉はない。手放して自画自賛しているだけです。

しかしこれはおそるべき授業です。

いったい、他者を批判している当の本人の自分自身はいったいどうなっているのでしょうか。

他者を批判することは誰にでも、いつも簡単にできることです。なにもわざわざ指導するまでもないことです。実際子どもたちは〈指示 三 感じたことを書きなさい。三分です。〉という、わずか三分で、それぞれ、これだけの「批判」をやっているのです。どの学級でやってもだいたい同じ批判の言葉がかえってくることは先にみた通りです。

そこには自分たちの学級の人間関係へ向けての、また、何よりも自分自身へ向けての反省や批判の言葉は一言もありません。

このような授業で子どもたちの〈いじめ〉についての認識を変えることなど決してできないのです。勿論、これは危険きわまる授業でさえあるといえます。自分たちの問題をタナ上げにする傍観的な生き方を助長するものとなるからにはほかなりません。

問題はそれだけではありません。いじめる方も悪いが、いじめられる方も悪いという喧嘩両成敗的な見方・考え方、

これは今日の差別問題を考える時に一番危険な、一番誤った考え方なのです。いじめめる方も悪いがいじめられる方も悪いと考えるはいけません。そんな考え方がある限り、いじめ問題というのはいつまでも解決しない。これは今日の同和教育、差別・人権教育の常識にさえなっていることです。ところが、いじめめる方も悪いがいじめられる方も悪い、こういう喧嘩両成敗的な見方・考え方に子供たちが陥ってしまっている。しかもそれを教師がなにもチェックしない、指導しない、なにも言わない、指導しないということを「法則」化のこの教師たちは誇りにしています。黙っていて子どもたちはどんどん批判をしてくれる、すごい批判を活発にやっている、私は授業中に何も一言も言わない、と言うべきです。いじめられる方も悪いのか。それによって差別・いじめの問題が解決するのか。自分たちはどうなんだ。こういうふうの問題を自分に引きつけて考えさせていく一番いいチャンスでもあるのです。そこからスタートするべきなのです。

いじめられている方も悪い——といった認識は差別をさらに温存させることになるのです。いかなる事情があるうと、いじめめる方に問題がある。また、それを傍観している側に問題があるのです。いじめの本質を見誤ってはなりません。

ある母親の批判

「命の授業」を追試したのが親の参観日だったので。それで担任の教師は、ある母親から次のような手紙を受け取ったのです。

いじめの授業を見せてもらった時、みんなとてもまじめに考えているなと思いました。でも、身近な問題とは思っていないようでした。何も悪くなくても仲間はずれにされたり、したりは誰でも思い当たる事もあると

思います。自分の子供が仲間はずれにされて、ある日突然一人でトポトポ帰ってきたら、「どうしたの？」と親は聞くし、子供は「仲間はずれにされた」と答えます。親はすぐ先生に言おうかと思いますが、大人になってもそういう事はよくあるので、やはりこれも人生の試練と思ひ、仲間はずれと戦っている子供をじっと見ているのです。強くなれ、強くなれ、負けるなと心の中で祈っています。

（いじめの授業を見せてもらった時、みんなとてもまじめに考えているなと思ひました。でも、身近な問題とは思っていないようでした。何も悪くなくても仲間はずれにされたり、したりは誰にでも思ひ当たる事もあると思ひます。学級の自分たちの問題が一つも出てこない。こういう親の、もちろん親ですから先生にさうとう遠慮もありますから、すいぶんと柔らかい言葉で言っているわけです。言っているんですけれども、一言で言えば「授業は活発であつたけれども、批判はほとんど出たけれども、自分たちの問題にちつともなっていない。それでいいんだろうか」という疑問の形で批判しているわけです。

実に本質をついた正当な批判です。私がさきに詳説したことを一言で言ひ表していて見事です。

ところがこの母親の批判を受けたその教師は何と（親の中にも、このように考えていた人がいたのは意外だった）という。

救いがたい、という思ひにさせられます。何故、謙虚にこの母親の言葉に耳をかたむけることができないのでしょうか。

「法則」化が自信をもって打ち出した「法則化道徳授業」なるものの反動的、非教育的本質はこれで十分すぎるほどあきらかといえましよう。（道徳教育の改革をめざして）旗上げた本書がきわめて非道徳的であることは何たる

皮肉でしょう。

これがもし文芸研の教師であつたら、「はっ！」として胸を突かれて自分の誤りを悟と思つたのです。謙虚に母親の批判を受け止めるであらうと思います。ところが、「法則」化のこの教師は次のように書いています。〈親の中にも、このように考えている人がいたのは意外だった。〉それだけです。そこには何ら自己批判も、母親の言葉に謙虚に耳を傾けるといふ姿勢もまったくみられないのです。もちろんこの「道徳の授業」といふ記録は「法則」化が自信を保持して出した第一弾なのです。編著者が「まえがき」の中で、次のように言っています。〈編著者である私が言うのもおかしいのですが、本書を手にしてしまったあなたはラッキーです。うぬぼれもいいところです。なぜかといひますと、〈すぐにマネできる道徳授業記録がある〉からだそうです。こんなものマネされたら困ります。生徒たちは親を批判し、教師を批判し、校長を批判し、いじめられた本人も批判し、そして自分はまったく棚上げしている。こんな授業を全国津々浦々までやってみなさい。どういふことになりますか。これでいじめの問題が本質的に解決できるのでしょうか。できるはずがありません。それなのに彼らは道徳の授業の改革を目指し、それをどんどん広げていくといっている。私はなにも揚げ足とりをしようとしていいるわけではありません。彼らが自信をもって打ち出した最初の「道徳の授業の改革」について具体的に話しているのです。恐るべきことです。

文部省が上から「生活科」を、道徳教育ということを隠して、しつけ教育をしようとしているそういう時に下から相呼応して、道徳の授業、あるいは「法則化・道徳」、「法則化・生活科」と称してこれからやういふこととしていのです。これはやはり教育の危機だと思ひます。そんなものほうとけば相手にする人はいないだらう。そんなものほうとけば自滅するんだといひおれませぬ。

そういう意味もあって『法則化批判』という本を黎明書房から三冊出しています。また国土社から『法則化国語の授業批判』というのが、今、出ています。ついで四冊あります。別に「法則」化に恨みがあるわけではありません。個人的には何もありません。問題は、私どもの民間教育団体の運動を正常に押し進めていくために、本当に人間とか世界とか値打ちとかがわかるような子供に育てたい。そのためにはどうしたらよいかといえば「法則」化と徹底的に戦う。その戦いの中で私たち自身が鍛えられる。私たちの弱点を暴かれる。まちがいがわかる。私は「法則」化批判の本の中で書きました。私が「法則」化を批判することは返す刃でおのれ自身の恥部を斬ることだ。批判の矢は文芸研の悪い実践にも向けられるべきものなのです。他者を批判するということは、おのれ自身を同時に俎の上に乗せるということなのです。そうでなければ批判の意味がありません。この「法則」化の授業のように自分以外をみんな批判する。しかし、自分はその埒外にいる。これは批判ではありません。非難しているだけです。本当の批判というのは相手を批判するその矛先が自分の胸をも同時に貫くものです。それが本当の批判です。そういう意味で「法則化批判」を書いたのです。これは「法則」化の本質を暴いているだけでなく、本当の教育はいかにあるべきか、文芸の授業はどうあるべきかということを裏返しに、具体的に述べたつもりです。

では、いったい私どもが文芸を教材として扱う時に、今回は詩を教材として〈人間観・世界観を育てる〉というけれどどういふふうな形でそれをやるのか。こういう点についてみなさん方お知りになりたいだろうと思います。もちろんこれは明日の分科会でみっちり報告もされ、討議もされるはずですからここではその前置きていどになります。すけどもお話しておきたいと思えます。

みなさんのお手元にあります資料をいらんください。これは工藤直子さんの『のはらうた』という小さな本、三冊

あります。この本の中から抜いたものです。これを使ってこれからお話ししてみたいと思います。

これは工藤直子さんのはらの住人の代表者として詩をまとめた、こういうふうな前書きがついています。ですから作者の名前も工藤直子じゃなくて、とかげりょういちとかけむしじんべえとかそういうふうになっています。書いている人は工藤さんです。けむしがこんな詩を書くはずがありませんからね。けむしになりかわって、工藤さんが書いている、歌っているという発想で書かれたものです。

「ひだまり」というのがあります。

ひだまり

とかげりょういち

しろく

やわらかい おなかを

いしに

ぴったりと くっつけ

いきを

すったり はいたりすると

.....

しっほのなまきず

ねむくなる

この詩は、いかにもとかげらしい。変温動物ですから、寒い時は一所懸命身体を暖めて、暖まると動き出す。そういうとかげがとかげであるということが見事にとらえられている。非常にリアリティがあります。そして、それを踏まえて「へしっぱのさきまで／ねむくなる」といった、言ってみれば擬人化された・人間化された・ユーモアの表現に なっているわけです。ここでいろんな虫や魚が出てきますけども、この工藤さんの詩も、いや、工藤さんの詩に限らず、詩というもの、あるいはすべて文芸というものはまずリアリティがなければなりません。これが一番基本になります。その次に、とかげはまさにとかげである。そのとかげも最もとかげらしいところがとらえられている。そしてその上にとかげの人物化・人間化がなされている。姿形はとかげだけでも、その本質は、心の真実はまさに人間そのものである。こういうふうな形で描かれていなければなりませんし、のはらうたは、まさにこういうふうな描かれています。

次に「おれはかまきり」です。

おれはかまきり

かまきりりゅうじ

おう なつたぜ

おれは げんきだぜ

あまり ちかよるな

おれの　こころも　かまも

どきどきするほど

ひかっているぜ

おう　あついぜ

おれは　がんばるぜ

もえる　ひをあびて

かまを　ふりかざす　すがた

わくわくするほど

きまってるぜ

ああ、まさにかまきりだといえますね。やくざな口調です。恰好つけているんです。なんかかまきりの姿が彷彿とします。そしてある種の人間のイメージが重なってきます。こういうふうには、まずいかにもかまきりだということと、これが大事です。これをリアリティといいます。リアリティを失った文章は、文芸として失格なのです。

次に「くねくねぶし」とじょっこれん。れんという連中の連です。なんか阿波踊りみたいです。

くねくねぶし

どじょっこれん

ちゃぼんととんで くねくねら

じゅうなんたいそう くねくねり

まっすぐいっても くねくねる

もっとおっち入 くねくねれ

みんないっしょに くねくねろ

はあ ひよろりのおい

さて ちゃっぼんぴん

あたまふりふり くねくねら

しっぽもいっしょに くねくねり

いつでもどこでも くねくねる

げんきいっばい くねくねれ

もひとつおまげに くねくねろ

はあ ひよろりのおい

さて ちゃっぼんぴん

なにか文法の活用と見ちがえるのではないかとという詩です。そのために工藤さんが書いたわけではありません。(は

あ ひよりのおい／きて ちゃっぼんびん／ごきげんですね。お祭り気分です。

こうやっていくつか読んできますと工藤さんの「のはらうた」の世界というものがみえてきます。その人物・人間像というものがみえてきます、だんだん浮かび上がってきます。

次は「くちばし」です。あひるひよこです。私、夕べ飲み過ぎまして舌がいつものようにうまくまわらないんです。ですからひっかかりひっかかり読みますけども、後でみなさんは自分で読みなおしてみてください。おもしろく、たのしくね。

くちばし

あひるひよこ

カッタララッタ

カッタッタ

カッタララッタ

カッタッタ

きょうは くちばしで

カ斯塔ネット／ごっこして

あそびました

「カッタララッタ」ばかり

してたものだから

ごはんをたべるとき

「いっタララッキまーす」と

いっっちゃつた

たしかにあひるはカッタカタッタやります。あひるの癖といってもいい。歩くのもたまたまする歩き方。カस्ताネットのように嘴をカッタララッタとやっている、そこをとらえている。へ「カッタララッタ」ばかり／してたものだから／ごはんをたべるとき／「いっタララッキまーす」と／いっっちゃつた」というのです。何か笑わせませぬ。人間というのはいつもそうやっている、ほかのことまでそうなってしまふんです。そういうところに人間の一つの真実が、ちっちゃな真実かもしれませんが、人間の真実が非常にユーモラスに表現されている。ちっちゃな真実と言いました、人間にとってちっちゃなとはいえませぬ。世に時めく総理大臣でもそれぞれみんな何か変な癖をもっているでしょう。いつも何か言われると、「厳肅に受けとめます」などと言います。厳肅に受けとめますといいますが、今度は呑み屋に行って、ママかなんかに言われた時にもついうっかりして「厳肅に受けとめます」なんて言うんじゃないですか。そりゃ冗談ですが。

次は「めだかおどり」にいきましょう。ぐるーぶ・めだかです。このぐるーぶというところがふるってます。めだ

か一匹ということはまずありません。小さい生きものというのは、すずめもそうですが、それらは敵から身を守るために、グループをつくって四方八方見はっていて、どこから天敵が現れてもすぐそれに対応できるような生き方をしているわけです。

めだかおどり

ぐるーぶ・めだか

ぼくらは　ぐるーぶ・めだかだぞ

およぐすがたを　みておくれ

うえからみれば　めが　てんてん

からだは　ちっちゃな　ほういっぼん

てんてん・ほう　てんてん・ほう

みんなならんで

こりゃさの　てんてんほう

工藤さん酔っぱらいながら詩を書いているんでしょうか、自分も歌ったり踊ったりしながらね。工藤さんに座談会とか何だとかで何回かお会いしたことがあります、いつもジーンパンのようなものを着て、寝袋かなんかが入って、

るようなリュックをかついで、風とともに入ってくるんです。うわー疲れたという感じでのっけから入ってくるんですよ。住所不定なんです。ほんとおもしろい人です。今度はオーストラリアへ行くと言っていましたよ。もう帰ってこないかもしれませんと言っていました。でも帰ってこられましたけどね。今度はどこへ行くんでしょうか。

よこからだって みておくれ

ぼくらもりっぱな さかなだぜ

せびれ おびれに はらのひれ

ぐいとむねはり せほねもぴん

ぐいぐい・ぴん ぐいぐい・ぴん

みんなならんで

こりゃさの ぐいぐい・ぴん

はあ てんてん・ぼう

こりゃ ぐいぐい・ぴん

はあ てんてん・ぼう

こりゃ ぐいぐい・ぴん

なんか呑みたくなくてきますね。

こういうふうにみてきますと「のはらうた」の世界というのは楽しい世界です。なんの世間の苦勞もない、悩みもない世界にみえるでしょう。みえるだけであって実はどこいそうじゃないというのが後にきます。しかし、屈託のない人生ですね。ここにでてくるぐるーぷ・めだかにしても。例えば「むぎむぎおんど」というのがありますが、虫とか魚だけでなくて麦畑の麦まで踊って暮らしているのです。

むぎむぎおんど

むぎれんざぶろう

あさひ のぼれば

そよかせ はしる

おいら むぎたちや せいぞろい

おう さやさや

えんや それそれ

くもが ながれる

ひばりが うたう

おいら むぎたちや ひとおどり

おう さやさや

えんや それそれ

かぜに つつまれ

ひかりを あびて

おいら むぎたちや きんのなみ

おう さやさや

えんや それそれ

麦畑が目の前に広がってきました。そして風にそよいで楽しそうです。今に刈り取られて人間に食われるなんてそんな先のことまで悩んでないんです。もう、人生の今を、ただひたむきに、喜んで、生きているのです。みなさんだって、いずれは爺や婆になってあの世に行くんだなんて思って生きている人はいませんね。私なんか、もう先の方が近いんです、今まで生きてきた人生よりもこれからの方が短いんです。だけでも、せんせん苦になりませんね。毎日毎日えんやそらとって生きています。

次に「おがわのマーチ」。それぞれ同じぐるーぶ・めだかの詩ですが、今度は色合いがちがっています。

おがわのマーチ

ぐるーぶ・めだか

ツン タタ ツン タ

みぎむいて ピン

ツン タタ ツン タ

ひだりむいて ピン

ぼくら おがわの たんけんたい

せびれ そろえて ツン タッタ

かえる よこめに

ツン タタタ

こぶな おいかけ

ツン タタタ

ぼくら おがわの たんけんたい

めだま ひらかせ ツン タッタ

ツン タタ ツン タ

みずくさ チヨン

ツン タタ ツン タ

こいしを チヨン

ぼくら おがわの たんけんたい

あさから ばんまで ツン タッタ

工藤さん、朝から晩までめだか見て書いたんじゃないのかな。いかにもめだかだな、と思います。まさにめだかというところが、一番よくわかる詩ではないでしょうか。ああ、ほんとにめだかだ、めだか以外の何ものでもない。これがまず大事なことです。

次は、そろそろ何となく悲しくなってきました。やはり、ぐるーぶ・めだかです。これに入る前に、今までいくつかの詩を（つづけよみ）しましたが、一番言いたいことは、それぞれが自分の条件・特質・本質、そのものズバリ、いかにもめだかかなだけどもそこにはまさに私たち人間の姿が如実にダブってくる。こういうことですね。めだかならめだかというだけでは、ああそうかですみますけども、「めだかのうた」にしても「むかでのうた」にしましても、ああまさにむかでだなと思いが、まさに人間だ。いや、俺の姿だとか。そういうものが強烈にあります。これが文芸というものの本質なのです。それがなければ文芸ではありません。めだかのことがまさにめだかだと書いてあるだけであれば、それは説明文であったり、科学の文章であったりするだけです。文芸というのは、めだか

であるということを通してそこに人間が描かれているのです。これはお祭り広場に来ている人間の姿、群像です。なんとも憎めない連中でしょう。出てくるのもそのあたりの庶民ですね。お祭り騒ぎが大好きで、なんやらブギウギ調の歌、くったくのない、楽天的なといいますか、作者の分身といいますか、作者の自画像なのではないかというふうな気さえします。それからまた、読者からみましても、ああ俺もこんなふうにして人生生きていってみたいなあ、さぞ楽しかろうと羨ましくなるような「のはら」の住人たちです。

こういうくったくのないように見える人生にも、やはり悲しいことあり、つらいことあり、いろいろあるのです。

なかま

ぐるーぶ・めだか

はっはっは

ぼくたちは

はっはっは

なかよしだ

てんかいっぴん なかよしだ

なっているなかまが

いっぴき いれば

あんあんあん

みんなまねして

あんあんあん

ないちゃうほどだ

はっはっは

あんあんあん

はっはっは

あんあんあん

（はっはっは／ぼくたちは／はっはっは／なかよしだ／てんかいっぴん なかよしだ／ないているなかまが／いっぴき いれば）やはりあれだけの仲間がいればなかには当然泣いている仲間もいるのです。もちろん泣いているだけじゃなくて怒っているのもいるかもしれません。すねてるのもいるかもしれませんね。ここでは泣いている仲間が一匹いれればどういふことになるかというと、（あんあんあん／みんなまねして／あんあんあん／ないちゃうほどだ）もらい泣きするのです、みんなで。かわいいではないですか。一匹泣いているのがいるとみんながいっしょになって泣いてやるというところが、うちの文芸研みたいです。うちの文芸研の連中は一人が呑みだすとみんなが呑みだすんです。一人が泣いているとみんながもらい泣きする。一人が踊りだすとみんなが踊りだすというように、悪くいえば

不和雷同、主体性がない。(あんあんあん／みんなまねして／あんあんあん／ないちゃうほどだ／はっはっは／あんあん／はっはっは／あんあん／) 泣き笑いの人生というやつです。忙しいといえば忙しいです。でも感情豊かに生きているのではないですかね。みんなが笑っていても泣きたいやつは泣いているのです。そうするとなんだか自分たちだけが笑っていたら悪いと思って、泣くまねをしているうちにほんとに泣いてしまふのです。そして泣いたり笑ったり、泣いたり笑ったり、泣いたり笑ったり。雨の日もあれば風の日もあると。

じつは、前書きで作者が次のようなことを書いています。(はる なつ あき ふゆ、はる なつ あき ふゆのはらむらを とおりすぎるきせつの ながれにひたって、これがまるで じぶんのころのなかの けしきみたい。ひとはみな じぶんののはらを ころのなかに しまっているのではないかしら)。ほんとに「のはらうた」を読んでいますと、ああこれは私たちの世の中だな、自分たちのまわりの世界だな。いやこれは自分の心の中の世界だなということをしみじみと考えさせられます。

今度は「ころとあし」というのがあります。むかでやすじです。(はるの ころが／ないるときも／これは悲しい詩なのですよ。(はるの ころが／ないるときも／はるの あしは／おまつりを している)。むかでは百本の足があるわけでしょう。むかでというのは百足と書くくらいですから百本あるんでしょうね。百本の足は心と関係なく動いているのです。せっせと。だからはるの足はお祭りをしている。(わっしよい わっしよい／ぎっぎ／すると ころも／なんだか わらえてきて／いっしよに／かけえを かけている／それいけ それいけ／わっしよい わっしよい／だから はるは／あまり ねけない／泣くに泣けないという言葉がありますけども。これ笑っていいのか、もらい泣きしていいのか、気のどくといっているのか、おかしいといっているのか、なんともし

わくわくしたい詩です。本人の身になるとつらいですよ。泣きたいのに手足が習慣的に動いている。それにっつらわつてついつい笑ってしまう。人間にもそういうところがあるようです。悲しいといつてワアワアなきながら、出されたおまんじゅうは食べているという女の人はいいと思います。男もそうかもしれませんが、特に女というのはそうではないかなあと思うことがあります。テレビドラマで、悲恋の話なのに、自動的に手が動き、おせんべぽりぽり、食べているうちに泣くに泣けなくなってしまう。そういうことも世の中、人間にはあるような気がします。

こころとあし

むかでやすじ

ほくの こころが

ないているときも

ほくの あしは

おまつりを している

わっしょい わっしょい

びっぴり

すると こころも

なんだか わらえてきて

いっしょに

かけこえを かけている

それいけ それいけ

わっしょい わっしょい

だから ぼくは

あまり ない

「おかさま」を見てください。これは、こびるいさむ。ちょっと勇ましい名前ですけども。

おかさま

こびるいさむ

きのえだに ぶらんと

おかさまに ぶらさがったら

ちまも なかま

はやしも なかま

あっちも こっちも

さかさまに なったよ

さかさまに ぶらさがって

「やっほー」と いったら

やまびこが さかさまに

「ほっやー」と こたえたよ

「嘘」ばかり言ってますね。でもそう聞こえたんでしょう。なにやら人生も様々なようです。「たび」というのがあります。けむしじんべえです。

たび

けむしじんべえ

びんびんの けさきほこほこ

ちびちびの あしききまこもこ

はっぱから はっぱへのたび

いちにちが まんまるくおわる

わかりますか。頭の悪い人はちょっとわからないでしょうね。葉っぱは丸いでしょう。この葉っぱを食って一日かかってもとに戻ってくる。なんやら、おんなじようなことをやっているみたいですね、また振出に戻って……。そういうけむしだからこそ、ある日けっせんと夢を見るんです。

へんしんのゆめ

けむしじんべえ

あしたになれば ぼくだって

あしたになれば ぼくだって

うん きっと

あしたになれば ぼくだって！

うちの文芸研の連中もよくこう言います。明日になれば僕だって、明日になれば僕だってちゃんとわかるようになる、ちゃんとできるようになる、と毎日言ってます。死ぬまで言い続けるかもしれません。いつまでも蝶になれなくて毛虫のまままで終わってしまったなんて、考えるとなにか悲しくなりますね。

言葉というのはいつも真実を語るとは限らない。私が今日話したこともやはりどこかおかしいところもあれば、まちがったところもあれば、同時にいいところもあるのです。かまきりりゅうじがいましたね。そのかまきりりゅうじが、こんなことを言うんです。へねぼうばかりしてられない けいかくてきにならなくちゃあ、これもうちの文芸

研の連中にピッタリあてはまります。の大会をやるのに計画的にやらなく、あなんてね。(そこでまずぼくは
けいかくひょうをつくる けいかくを 立てた やるぞー)って書いて ます。いつになったら実際の計画が実
現するんでしょうかね。計画的にやるためには計画表をつくる計画をまず立 なければならぬ。たしかに論理的で
筋道が立っているんですけども、なにか少しおかしいですね。何がおかしいんでしょう。いつもこういうふうに言っ
て何にもやらない人がいます。すべての条件が整ったらやる。ところが条件などというものは整ってからやるもので
はなくて、やっっていく中で条件が整っていくものです。ところがたいていは条件がないから、条件が悪いからやらな
い、こういうわけで何もしないで一生すごしてしまう。条件というのはやっっていく中で条件ができる。さらにやっ
っていく中で、さらにいい条件ができる。作りながらいくものです。作ってからやるのではなくて、作りながらいくもの
です。ゆきながら作っていくものなのです。かまきりりゅうじみたいになへやるぞうー)と試みてはじまらな
いんです。

「かんがえごと」というのがあります。これは、こねずみ・しゅんです。これは明日の分科会に密接に関係のある
詩ですから心して聞いてください。

かんがえごと

こねずみしゅん

こねずみは みんな(みんなというのはいみなさんのことですよ)

どんぐりをかじりながら(まさかどんぐりなどかじらないでしょうが、こねずみだからかじるんですが)

かんがえごとをする

ひとつかじって……はてな？

ふたつかじって……なるほど

みっつかじって……そうか

よっつかじって……でもね

いっつかじって……ええと

むっつかじって……しかし

ななつかじって……たとえばさ

やっつかじって……つまり

ここのつかじって……やっぱり

とうで とうとう わかった！

きょうは 10こ かじったので

10こぶん かんがえごとが できた

みなさん、明日、うちの文芸研の連中が、提案・レポート・報告をしますから、はてな、なるほど、そうだ、でもね、ええと、しかしこうじゃあ、たとえばさこうじゃあ、つまりこうだとかね、こんなふうにやってみてください。どんぐり十個なんていわずに百個ぐらいかじるつもりで、はてなとか、なるほどとか、しかしとか、でもさとかね、やっ

ぱりねとか、たとえばねとか。おおいにこういうふうに使ってやってください。分科会が始まる前に、黒板にこれを書いて、今日の分科会こねずみしゅん的にいきましようなんてね。こういうふうにやってみてください。明日の分科会のための詩でありました。

こういうふうに「のはらうた」の住人は屈託なく、お祭り騒ぎが大好きで、楽天的にやっているようですが、それなりの悩みもあれば、悲しみもあれば、しかしまたやる気十分です。そのくせ現実性のない計画の立て方をしてみたいいろいろすべったり転んだりしながら、しかし全体としていえば明るくのびのびと生きている。こういうぐあいに学級もあるとおもしろいですね。サークルだってそうです。サークルにはけむしのじんべえみたいなのもいるし、かまきりなとかかというのもいるしね。これサークルのメンバー一人一人にたどえてこんな詩を作ってみたらどうでしょうね。それぞれみんなお祭り広場みたいな世界になってくるのではないのでしょうか。泣いたり、笑ったり、怒ったり、すねたり、いろんなそういうことをしながら人生はすばらしいな、世界は結局はおもしろいな、とこういうふうな感じになるとよいのではないかと思います。

工藤さんのもう一つの前書きにこんなのがあります。へのはらむらは てんきのよいひもあれば、あめふりのときもあります。これは世の中すべてそうなのです。天気の良い日ばかり続けばいいと思いますがそうではありません。雨の降る日は悪いかというと、雨が降るからまたいいのです。でも、雨降りばかり続いたら困るのです。雨が降ったり天気になったりするから世の中、人間、幸いなのです。へのはらむらのみんなは きげんののよいときもあれば、しょげているときもあります。うちの文芸研のサークルのみんなもそうです。御機嫌な時もあるしおれている時もあります。へいろんなときがあり いろんなきぶんがあります、かわらないのは いつも だれかが うたをう

たっていることです。／うたは、こころやからだに よくきくようですね。／かまきりりゅうじ君などは／「かなしくったってな、／そのきぶんも うたにしてみりゃ／なんだかわらえるぜ。／げんきでるぜ」だそうです。／そんなわけで、さんぼしていると いつも どこからかうたがきこえるものですから、かきとめたうたが だいぶたまりました。それがこの詩集です。三冊あります。どこか町の本屋さんで見かけたら買ってみてください。いいかげんゆうつな時に読んでみてください。やる気がでてきます。それがやはり文芸というもののおもしろさなのだと思います。「のはらうた」の世界はこういった世界です。そこにはいろんな住民がいるわけです。こののはら村の世界を私たちが読む時に、この世界をとおして現実の自分たちの世界をもう一度見直すことになるのです。メガネといってもいいでしょうか。楽しい、うきうきした真っ赤なメガネで見ると、のはら村の世界がバラ色に美しく見える。灰色のメガネをかけて見れば灰色に見える、というようなものです。文芸・詩というものは一つの世界ですから、この世界の中に入るといふことは、この世界をくぐって今度は現実の世の中を、現実の人間をもう一度見直すことになります。そうすると、今まで気がつかなかった、今まで見えてなかったものが見えてきます。そういうえばうちの文芸研のサークルも「のはらむら」だなあと思います、「のはらむら」そっくりだと。ほんとにゲジゲジまでいるんですから。ほんとにそっくりだなあと思います。文芸研のサークルを鏡に映したようです。それを私どもは典型としてとらえるといえます。

この工藤さんの詩は人間の生き方、人間の集団そういうものを見事に一つの典型としてさしだしています。そこには、一人一人の読者が自分の姿をみることができます。自分の身の回りの現実をそこから、もう一度見直すことができます。いろいろな作家の、いろいろな詩人のさまざまな世界があります。そういう世界にたっぷりひたる。そ

の世界をとおして私たちの現実の世界をいろいろな角度からまた見直してみる。こういうことが大変楽しいことだと思えます。

文芸といいますが、詩も文芸です、言葉の芸術です。芸術というのは美にかかわるからです。真実を追求するのは文芸だけではなく哲学・宗教・科学もそうです。しかし、文芸は人間の真実を美として表現するところに芸術としてのありようがあるわけです。ではいったい美とは何かということになります。この「のはらうた」の美、——美というのはきれいという意味ではなくて、おもむきとか、味わいとかがいったものです——それは一口でいえばユーモアです。文芸における美というのはユーモアだけではありません。いろんながありますけども、では、ユーモアとは何かといいますが、本人はしごくおお真面目なのです、くそ真面目なのです。あるいは本人は泣きたいほど悲劇的かもしれません。その本人の△内の目▽になってみると、悲しみであり、おお真面目な精神状態であるわけです。ですが、△外の目▽から見ると何とも笑えてしまう、おかしいという時の笑いがまさにユーモアなのです。かまきりにしても、めだかにしても精一杯・真面目に・ひたすら生きているわけです。実直に生きているわけです。しかし私たち読者が△外の目▽で見るとなんか笑ってしまう。笑ってしまうけどもそこになにか人間の真実がある。自分に共通するものがある。笑いながら笑っておれないなあ。こういうふうなものがあるのです。

ですからどのような人間観・世界観を育てるかといいますが、哲学的な人間観・世界観、あるいは宗教的な世界観、科学的な人間観・世界観といろいろあるわけです。私どもの文芸教育研究協議会の活動領域でいいますと、文芸的な人間観・世界観を育てるところが中心になってきます。今の「のはらうた」を取り上げて授業するとすれば、結局、文芸的な人間観・世界観を育てるところです。しかしそれはけっして科学的な人間観・世界観と矛盾する

ものではありません。関連するものであるはずですが、関連がないとすれば子供たちの人間観・世界観がバラバラに引き裂かれてしまうからです。ですから一貫して一つの共通な人間観・世界観というものが、そこで生み出される、作り出される、育てられるということが大事なのです。

さてこの美の問題につきましては、もう少し詳しく具体的にお話ししなければなりません、午前中の基調講演では、こういう問題を話す場がありませんから、午後の時間にそのことについてお話しさせていただきますと思います。